

2コリント人への手紙

第5週目

1

VI. パウロ、コリントの人々、「大使徒たち」 (10:1-13:14)

2

10-13章のハイライト

- パウロが自分の使徒職を擁護
- 「大使徒たち」
- 愚か者の演説
- 霊的戦い
- 本物の弟子訓練のしるし
- 弱さの中に神の強さが完全に現れる
- 偽リーダーと偽の教えを認識するために見分ける

3

定義

使徒職/使徒的権威: イエスと共にいた人でなければならない。福音を宣べ伝える、教える、教会を確立するためにイエスから任命された。

使徒たちはイエスの教えの最初の教師であり、解釈者であり、他の人々がメッセージを正確に伝えるようにする責任があった。

彼らは教会の統治と実践において権威ある役割を果たした。使徒たちはリーダーたちと信徒たちを愛し、励まし、感化しなければならなかった。

4

内部者:

- (a) パウロの使徒的権威に服従したコリントの信徒たちの大多数 (7:5)。
- (b) 悔い改めることを拒み、性的不道德と放蕩を続ける少数派の人々 (12:21; 13:2)。
このグループは「大使徒たち」に魅了され、影響を受け続けている。

外部者:

コリントの信徒たちの中で、少数派に影響を与えた新来者たち (パウロは皮肉を込めて彼らを「大使徒」と呼ぶ)、また偽預言者、欺く者、サタンの使者たちである。

「大使徒たち」:

- 彼らは修辭的才能があり、知識とスピーチを非常に重視している (10:10; 11:6)。
- 彼らは奇跡を起こすことができ、神秘体験を楽しんでいると主張する。
- 自分勝手な称賛に終始する。
- 彼らは自分で自分を測る。
- 自己中心的で、高慢で、何においても自慢する。

修辞的手法: 聞き手を説得したり、励ましたり、挑発したりして、ある見解を理解させたり、再考させたりすることを意図した話し方の様式。

修辞的手法としての愚かな者の役割: 話し手が愚かな者の役割を演じるとき、彼らは変装して真実を語る者になる。愚かな者は、比喩、類推、比較、皮肉、さらにはユーモアを用いて、何が真正であるかに照らして議論の愚かさを暴く。

パウロは、自分の愚かな者の話しの中で愚かな者の役割を演じている。**11:1-12:10**

パウロ、コリントの人々、「大使徒たち」(10:1-18)

パウロは自分の使徒職を擁護 (10:1-6)

¹ さて、私パウロは、キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします。私は、あなたがたの間にいて、面と向かっているときはおとなしく、離れているあなたがたに対しては強気な者です。

² ……私は、あなたがたのところに行くときには、私たちを肉に従って歩んでいるかのように考える人々に対して勇敢にふるまおうと思っているその確信によって、強気にふるまうことがなくて済むように願っています。³ 私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。

⁴ 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。⁵ 私たちは、さまざまな思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、

解説

パウロは恵み深く、親切であった (彼の聴衆による)。

パウロに対する非難:

- パウロは「面と向かうのは自信がない」: 離れているときは大胆。
- パウロの決断と振る舞いは、この世--肉的な基準に基づいたものだ。

パウロの応答:

私はこの世に生きているが、私の武器はこの世のものではない(私に敵対する者たちが使うような空想的な話／この世的な知識が私の武器ではない)。

霊的戦い:

私たちの武器--神からのもの--要塞(すべての思弁)をも打ち砕く神の力がある。

私たちの人生のあらゆる部分--動機と行動--は、キリストに従順でなければならない(とりこにされる)。

11

パウロとコリントの人々 (10:7-11)

⁷ あなたがたは、うわべのことだけを見ています。もし自分はキリストに属しているように、私たちもまたキリストに属しているということを、もう一度、自分でよく考えなさい。⁸ あなたがたを倒すためにではなく、立てるために主が私たちに授けられた権威については、たとい私が多少誇りすぎることもあっても、恥とはならないでしょう...

パウロの手紙は「重みがあり、力強い」と言われるが、実際に会ってみると、パウロは弱々しく、印象に残らず、彼の話は何の役にも立たない。

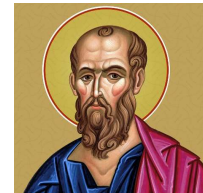
12

解説

コリントの人々は間違ったレンズを通して見ている。「大使徒」:

- パウロは建て上げる一方で、コリントの信徒を倒す。
- うわべで判断する。
- パウロのことを自分たちと同じ度合いで、「キリストの内」に生きていないと主張。
- パウロの見た目をさげすむ (卑劣な攻撃)。

固定観念としてのパウロ (およそ西暦200):
小柄で、はげ頭で、眉毛がふさふさしていて、
鼻はかぎ鼻で、足が曲がっていた。



13

パウロと「大使徒たち」(10:12-18)

¹² 私たちは、自己推薦をしているような人たちの中のどれかと自分を同列に置いたり、比較したりしようなどとは思いません。しかし、彼らが自分たちの間で自分を量ったり、比較したりしているのは、知恵のないことなのです。¹³ 私たちは、限度を越えて誇りはしません。私たちがあなたがたのところまで行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのです。¹⁴ 私たちは、あなたがたのところまで行かないのに無理に手を伸ばしているではありません。事実、私たちは、キリストの福音を携えてあなたがたのところまで行ったのです。

14

¹⁵ 私たちは、自分の限度を越えてほかの人の働きを誇ることはしません。ただ、あなたがたの信仰が成長し、あなたがたによって、私たちの領域内で私たちの働きが広げられることを望んでいます。¹⁶ それは、私たちがあなたがたの向こうの地域にまで福音を宣べ伝えるためであって、決して他の人の領域でなされた働きを誇るためではないのです。

¹⁷ 誇る者は、主を誇りなさい。¹⁸ 自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です。

解説

パウロは自分が「大使徒たち」と比較されることを拒んだ:

- 彼らは自らを称賛していた。
- 彼らの空想話や人間としての知識には全く力がない。
- 彼らは自分で自分をはかっていた。
- 彼らは自分たちを自分たちのはかりで比較していた。
- 彼らはすべてを自慢していた。

非難者はパウロが自分たちの管轄に干渉していると訴えた。

パウロの応答: あなたがたは正気か？私がこの教会を始めたのだ。みんな、私の働きのもとで救われたではないか。「大使徒たち」は他の人の働きを自分たちの手柄として誇っている！

「向こうの地域」—宣教師の心。

「誇る者は、主を誇りなさい。自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です。」

愚か者の演説 (11:1-12:10)

愚か者の演説は、10章から13章にかけて最も主要なテーマである。

- 愚か者の演説に対する紹介 (11:1-21前)
- 愚か者の演説 (11:21後-12:1)
- 啓示と肉体のとげ (12:1-10)

愚か者の演説に対する紹介 (11:1-12)

¹ 私の少しばかりの愚かさをこらえていただきたいと思います。いや、あなたがたはこらえているのです。² というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。³ しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。⁴ というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。⁵ 私は自分をあの大使徒たちに少しでも劣っているとは思いません。

⁶ たとい、話は巧みでないにしても、知識についてはそうではありません。私たちは、すべての点で、いろいろな場合に、そのことをあなたがたに示して来ました。⁷ それとも、あなたがたを高めるために、自分を低くして報酬を受けずに神の福音をあなたがたに宣べ伝えたことが、私の罪だったのでしょうか。⁸ 私は他の諸教会から奪い取って、あなたがたに仕えるための給料を得たのです。⁹ あなたがたのところにいて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニヤから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたのです。私は、万事につけあなたがたの重荷にならないようにしましたし、今後もそうするつもりです。

¹⁰ 私にあるキリストの真実にかけて言います。アカヤ地方で私のこの誇りが封じられることは決してありません。¹¹ なぜでしょう。私があなたがたを愛していないからでしょうか。神はご存じです。¹² しかし、私は、今していることを今後も、し続けるつもりです。それは、私たちと同じように誇るところがあるとみなされる機会をねらっている者たちから、その機会を断ち切ってしまうためです。

解説

パウロは、コリントの人々が自分たちの人生を変えた福音に立ち返ることを切望している。

しかし、彼らの心はいとも簡単に迷わされた。彼らは蛇の狡猾さに惑わされた。

「大使徒たち」は、別の「イエス」、別の福音を宣べ伝えた。侵入者たちの霊はキリストの霊とは異なっていた！

コリントの人々は、そのメッセージとメッセンジャーを気に入った！

相手の狙いを裏切る (11:7-12)。

私が無償で宣べ伝えたのは罪だったのか？

彼らは無償で説教すると言いながら、説教の代価として金を受け取る (11:7-10)。彼らはみことばの行商人であり (2:17)、みことばを改ざんする (4:17)。

コリントの人々はこのような詐欺師たちを我慢していた。

続き (11:13-15)

¹³ こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であつて、キリストの使徒に変装しているのです。¹⁴ しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。¹⁵ ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。

解説

パウロは「大使徒たち」のことを説明している。

「大使徒たち」は、「偽使徒たちであり、あざむく働き人」だ。

彼らはキリストの使徒を装っているが、光の天使を装うサタンと同じだ。サタンのしもべが義のしもべを装うのも無理はない。

「大使徒たち」は自業自得になる。

続き (11:16-21前)

¹⁶ くり返して言いますが、だれも、私を愚かと思ってはなりません。しかし、もしそう思うなら、私を愚か者扱いにしないで。私も少し誇ってみせます。¹⁷ これから話すことは、主によって話すのではなく、愚か者としてする思い切った自慢話です。¹⁸ 多くの人が肉によって誇っているので、私も誇ることにします。

¹⁹ あなたがたは賢いのに、よくも喜んで愚か者たちをこらえています。²⁰ 事実、あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、だまされても、いばられても、顔をたたかれても、こらえているではありませんか。²¹ 言うのも恥ずかしいことですが、言わなければなりません。私たちは弱かったのです。

解説

パウロはコリントの人たちに向かって話している:

私を愚か者と思わないでくれ。

しかし、あなたがたが愚か者たちに耐えてきたのだから、私も愚か者として話そう。

あなたがたは自分は賢いと言っている!

「大使徒たち」はこのようなことをした:

- あなたがたを奴隷にした。
- あなたがたを搾取した。
- あなたがたを利用した。
- そしてあなたの顔をたたいた。

「言うのも恥ずかしいことですが、私たちはあなたがたに対して弱かったのです。」

27

愚か者の演説 (11:21後-12:10)

比較: 敵対する者とパウロ (11:21後-23前)

²¹ ...しかし、人があえて誇ろうとすることなら、—私は愚かになっ
て言いますが—私もあえて誇りましょう。²² 彼らはヘブル人
ですか。私もそうです。彼らはイスラエル人ですか。私もそう
です。彼らはアブラハムの子孫ですか。私もそうです。²³ 彼ら
はキリストのしもべですか。(私は狂気したように言いますが)、
私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く...

28

解説

パウロは偽の使徒たちと自分を比べて自慢している。彼は同等であるが、それ以上に優れている...

ヘブル人	彼らはそうですか？ 私もです。
イスラエル人	彼らはそうですか？ 私もです。
アブラハムの子孫	彼らはそうですか？ 私もです。
キリストのしもべ	彼らもですか？ 私のほうが優れています。

最初の3つはアイデンティティに関連している(自分で得ることはできない)。

29

私はより「優れた」キリストのしもべである。

パウロには優れた資格があった:

- ・ 異邦人に福音を伝える槍の穂先。
- ・ ユダヤ人と異邦人の割礼論争を仲裁。
- ・ 何十人ものリーダーを採用し、指導。
- ・ ガラテヤ、マケドニア、アカヤ、アジアに教会を開拓した
(ローマ15:18)。

しかし、パウロは自分の苦しみと、自分の体に刻まれた「印」に焦点を当てることを選んだ。

30

パウロの弱さ (11:23後-33)

²³ ... 牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。²⁴ ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、²⁵ むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。²⁶ 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い

²⁷ 勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。²⁸ このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。²⁹ だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるのでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか。³⁰ もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。³² ダマスコではアレタ王の代官が、私を捕らえようとしてダマスコの町を監視しました。³³ そのとき私は、城壁の窓からかごでつり降ろされ、彼の手をのがれました。

解説

パウロの弱さ:

- 死の危険にあったことが少なくとも12回 (11:22-25)。
- 5回 むち: 39回 (胸に13回、26回は背中)。
- 3回 むち(樺の木を一緒に結んだもの)。
- 1回 石打ち ユダヤ人によって死刑の罰として。
姦淫者、冒涇者、背教者のために。
- 3回 難船。

危険:

- 旅路の中の危険: パウロは観光客ではなかった。16万キロメートルをほとんど足で旅した。
- 川の難、盗賊の難。
- ユダヤ人と異邦人からの危険。
- 都市の難、荒野の難、海上の難。
- にせ兄弟の難 (リストの中の一番最後に出てきて、単独のものだ。すべての中で一番の危険)。

パウロへの個人的影響 (11:27-29):

- 勞し、苦しむ。
- 眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなかった。
- 寒さに凍え、裸でいたこともあった。
- しかし、これら以上にすべての教会からの不安。

屈辱的な脱出 (11:30-33):

ダマスコでは、かごで窓から城壁を伝って脱出した。

パウロの弱さ: それは--キリストのような--苦しみであり、使徒の証である。そして、キリストが強くされたのは、彼の「弱さ」の只中だったのだ。

35

啓示 (12:1-6)

¹ 無益なことですが、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。² 私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に—肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです、—第三の天にまで引き上げられました。³ 私はこの人が、—それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです、—⁴ パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。

36

⁵ このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。⁶ たとい私が誇りたいと思ったとしても、愚か者にはなりません。真実のことを話すのだからです。しかし、誇ることは控えましょう。私について見ることに、私から聞くこと以上に、人が私を過大に評価するといけなからです。

解説

*パウロは、啓示なしに啓示の話をした。

「第三の天にまで引き上げられました」

パウロは、「語るにはあまりにも貴重すぎる体験」だと言った。

イエスはパウロを使徒として任命した。この啓示はパウロの使徒職を基礎としている。

肉体のとげ (12:7-10)

⁷ また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。⁸ このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。⁹ しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。¹⁰ ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

39

解説

*パウロは癒しなしに癒しの話をした。

とげ、もしくは *skolops* スカラプス (破片、とげ、棒)。

サタンの使いがパウロに与えたのは、パウロが高ぶらないように、常に注意を促すため(現在形)であった。そして、彼にスカラプスを与えたのは神だった。それは神の御心であった。

私たちには「スカラプス」の意味が(破片、とげ、棒)何なのか、またはその問題が「肉体的な」ものなのか「人間関係的な」ものかわからない。

40

パウロは「とげ」が取り除かれるために三度祈った。神の「賜物」によって、パウロはへりくだり、地に縛り付けられた。しかし、神の「恵みは十分だった」。

私たちがこのパウロの「とげ」の性質を知らないことは良いことだ。その部分を空欄にして自分のこととしてあてはめることができる。

神の力は私たちの弱さの中に完全に現れる。

まとめ

パウロの敵対者たちは、傲慢と高慢に満ちた「幻と啓示」を経験した。パウロは主により頼んでいた。神の力はその弱さのうちに完全なものとされる。

パウロは自分の弱さを「誇った」。なぜなら、このような弱さの中にこそ、まさにキリストが強くなることを確信していたからである。

愚かさ、誇ること、弱さはパウロの演説の3つの主要テーマだった。

パウロのコリントの人々に対する愛と懸念 (12:11-21)

パウロのコリントの人々に対する深い愛と懸念。

パウロは、自分はお金を受け取らないという決断をしたことと、人を操り利用した「大使徒」たちと対比させている。

パウロは、これからの訪問のための準備のための段取りをし、コリントの人たちが自分たちから率先して正しいことをするように励ました。(13:1-10)。

神学的考察と自己吟味 (13:5-6)

⁵あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエスキリストがおられることを、自分で認めないのですか—あなたがたがそれに不適格であれば別です。—

自己吟味と自己考察:

- コリントの人々に、神の恵みとキリストとの関係について考えるよう勧めること。
- 弱さに直面する時の神の恵みと力について考えること。
- 実生活の中で神の恵みを示すことについて考えること。

パウロの自己吟味

- パウロはキリストを通してなしたことを決してないがしろにしなかった。自分が他の使徒たちより努力していたことはしっていた。しかし、彼の働きの結果のすべては神が彼を通して働いてのことだった。
- パウロは自らを神の恵みの副産物だと考えていた。「神の恵みによって、私は私である」(1コリント15:10)。
- パウロは自分自身について謝罪することはなかった。彼は、自分の長所も短所も、すべて神から与えられたものだと知っていた。神はアナニヤに言われた。「これは私が選んだ器だ」(使徒9:15)。

45

パウロのミニストリーにおける原則

- イエス・キリスト、十字架につけられたお方(1コリント 2:2)。
- 私が弱い時に、私は強い (12:10)。
- 誇る者は主を誇り栄光を帰しなさい (10:17)。
- 私が求めているのはあなたがた自身だ (12:14)。
- 私たちはみな、キリストのさばきの座の前に現われる (5:10)。
- すべてのことを神の栄光のためにしなさい (1コリント 10:31)。

46

現代社会におけるパウロの影響

神学

- 信仰の基本教義。
神学。罪の教義、キリスト論、救済論、聖霊論、教会論、終末論。
- 恵みの変革的力。
- 御霊の賜物と、御霊の実。
- 聖霊。
- 私たちの弱さの中の神の力強さ。
- 神にある慰めと、惜しみない心。

47

- 多様性と包括性:人の平等さ。
- 個人的道徳性と倫理的行動。
- 共同体としての教会: 一致、愛、赦し、交わり、チーム、経済。
- 宣教の実践。
- 社会: 家族、対人関係、男女平等、ミニストリーにおける女性。

48

最後の言葉と頌栄 (13:11-13)

¹¹終わりに、兄弟たち。喜びなさい。完全な者になりなさい。慰めを受けなさい。一つ心になりなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。

¹³主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。